

立教大学 コミュニティ福祉学部

東日本大震災復興支援 プロジェクト

全学部
参加OK

陸前高田市
気仙沼市
南三陸町
石巻市

いわき市

現地
7拠点

東久留米市・新宿区



復興支援プロジェクトからのメッセージ

立教大学コミュニティ福祉学部は、東日本大震災「3.11」の1か月後の2011年4月13日に、東日本大震災復興支援プロジェクトを立ち上げ、これまでの4年間に、延べ180回、2,400人を超える学生と教職員が活動に参加してきました。主な活動先は、陸前高田市、気仙沼市大島、南三陸町、石巻市、いわき市、そして被災地からの避難者を受け入れている新宿区、東久留米市などで、それぞれの時期と地域特性に合わせた活動を展開してきています。

「3.11」から4年経った今、被災地では復興の足音が少しずつ聞こえてきていますが、被災された方や避難された方は、まだまだ日常の生活を取り戻したわけではありませんし、これから先も、その努力と苦労が続くものと考えられます。

私たちは、そうした地域や人々の主体性を尊重しつつ、彼らのニーズに寄り添い、今後も継続的長期的な活動を続けるつもりです。この冊子は、これまでの活動を簡潔に紹介し、手に取った多くの人たちが私たちの活動に参加されることを期待して、作成しました。お読みいただき、また、友人や知人の方にもお伝えいただければ幸いです。



2015年4月1日

立教大学コミュニティ福祉学部

東日本大震災復興支援プロジェクト

委員長 森本 佳樹



1 陸前高田 交流プログラム

岩手県陸前高田市は、市の中心地であった市街地すべてが流失してしまい、人口の9%が亡くなるという甚大な被害を被った場所です。

身を置き感ることと人と交流する

陸前高田交流プログラムは、人が生活していることを実感しながら人と交流を継続していくことにより、お互いに影響を受け合い、ともに成長していくことをめざしています。

「車から降りて歩くこと」「たくさん見ること」「たくさんの人と話すこと」、陸前高田交流プログラムが大切にしていることです。

はじまりのはじまり

このプログラムでの交流は、準備された交流であり、「出会い」です。出会った後に手紙を送り交流を続けることで「関係」や「絆」が生まれてきます。このプログラムは「はじまりのはじまり」を提供し



ます。その後は、自分の形で交流を続けることをしてください。復興の道のりは長く在学中だけで終了するようなものではありません。卒業後も絆を深めてほしい、そう願っています。

生活を想像する

元々どのような生活をされていた方々なのかを知ること、今の生活の大きな変化を知ることができます。事前に資料をよく読み、陸前高田に滞在中は想像力をもって過ごしてください。

2 気仙沼大島 交流プログラム

気仙沼市大島は、宮城県北東部の気仙沼湾に位置し、美しい景観で有名な島です。大震災発生の際には、島民が孤立状態になる事態にも見舞われました。約3,000人が暮らす大島では、小学校・中学校はそれぞれ1校しかありませんが、中学校の校庭に建てられた仮設住宅は震災から5年目となる今も存続しています。

子どもたちの夢を紡ぐ交流活動

震災の影響を受けた子どもたちと交流してほしい、という島民の声から、大島の活動は始まりました。「立教大学へんきょうお手伝い隊」を結成し、小・中・高校生と勉強やレクリエーションを通じた交流をほぼ毎月1回、続けています。小学校の季節行事にも参加し、運営のお手伝いもさせていただいています。夏には砂浜に子どもたちが造形をする行事もあり、大島の文化や自然から気づかされることもたくさんあります。

少子高齢化が進む島では、大学生はめずらしい存



在です。学生のみなさんには、「身近な先輩」として、子どもたちの人生の記憶に残る出会いを紡いでほしいと願っています。仮設住宅の高齢者の方々との交流、地域行事への参加、地元の方々の体験を分かち合う訪問活動も大切にしています。

大島を知り、大島に学び、日本の未来を考える

震災後の地域の変容のなかで、被災地では福祉施設の存続問題や学校統廃合問題なども出現しています。大島では架橋工事が進んでいますが、橋が架かったあと、島の暮らしがどう変化するのかも地域の課題です。大島は、「第二の故郷」のように「帰れる場所」です。大島の歴史や暮らしに学びながら、一緒にこれからの日本を考えていきましょう。

南三陸 交流プログラム

コミュニティを紡ぎ直す活動を学ぶ

南三陸の地には、朝廷にまつろわぬ、蝦夷と呼ばれる人びとの一大拠点だったという歴史があります。今回の激甚な災害に対しても、被災された方々自身が生活支援員となり、壊れたコミュニティを紡ぎ直す仕組みが、震災直後から考案され、着実に機能しています。自分たち自身の手で地域力を高める仕組みづくりです。

この地域の方々は、自立心に富む一方で、外から来たものを温かく迎え、「前向きに受け容れていく」気風も色濃くもっています。

そのため本拠点での活動の主旨は、南三陸の方々に寄り添いながら、彼らのコミュニティの再編の仕方を学ぶことにあります。

具体的には、生活支援員さんの活動を動画で撮影する、海辺で暮らしていた方々と交流しながら、震



災以前の「暮らしの思い出」を紡ぐパンフレットを少しずつ作成していくことです。

「めだかの楽園・楽校」を中心とした 石巻交流プログラム

細く長いつながり

震災前からのご縁で、高齢者介護事業所「めだかの楽園」「めだかの楽校」の利用者・スタッフとの交流を中心に、活動を続けてきました。「何かあったら支援をお願いしたい」「細く長くつながってきたい」という先方のニーズを尊重し、常に寄り添い、求めがあったら手助けできる体制・関係づくりに主眼をおいて活動をしてきました。学生が皆で一緒に楽しめるイベントを企画・実施をする中で、個々の利用者・スタッフとのつながりが自然にでき、お互いに会えることが楽しみになっています。

現地を知り、学び、考える

被災地の出来事は他人事ではありません。当時何があり、そして今何が起こっているのかを学び、自分たちがやるべきことを常に考え、行動する。そんな学生を増やしていくことがこの活動のもう一つの意義です。石巻に行く度に、地域を歩き、人々の話を聴き、感じたこと、考えたことを率直に話し合っ



ています。そして活動からの学びを記憶と記録として積み重ね、自分たちの生活も見つめ直しながら、復興の一助となるような活動の可能性を広げること努めています。

いわき 交流プログラム

福島復興をともに考え、伴走する

福島県は、地震・津波の被害も甚大でしたが、原発事故により、福島県いわき市には、原発が立地していた双葉郡から2万人以上が避難しています。そこで、いわき市と双葉郡の避難者の方々への支援が必要となっています。

「いわき交流プログラム」では、多くの方が亡くなられた薄磯海岸を訪問するとともに、新たに建設された災害公営住宅(団地)での新しいコミュニティの形成支援に取り組んでいます。

また、双葉町の方々が避難生活を送っている、南台仮設住宅地内にある双葉町社会福祉協議会サポートセンター「ひだまり」を定期的に訪問して、震災前や原発事故、現在までのお話をうかがったり、社会福祉協議会の方から、被災者の支援とはどのようなことを学んでいます。



さらに、「いわき交流プログラム」では、行政やNPO法人などの支援側との交流も行っています。福島県庁いわき地方振興局の職員の方から、福島県の復興政策について討論するほか、福島県から「コミュニティ交流員事業」を受託している現地のNPO法人「みんぶく」とも連携し、団地での孤立防止・コミュニティ形成支援を行います。このように、行政、NPO、社協、地域の自治会などと共に多面的な視野から復興支援を考えていくプログラムです。あなたも福島と共に歩みませんか？

東久留米交流プログラム (福島からの避難者支援)

「ふれあいの会」との相互交流

東久留米は、福島県から東京都東久留米市、および近隣地域に避難した方々との相互交流を目的として、2014年9月に立ち上がった新たな活動拠点です。

新座キャンパスからほど近いこともあり、大学の環境や人材を活かした活動が、今後期待されています。

活動内容は、東久留米住宅の避難者グループ「ふれあいの会」の方々と、一緒に企画しています。2014年度には、東久留米住宅集会所での花火大会やクリスマス会、富士急ハイランド&竜ヶ岳ハイキングの遠足ツアー、学園祭への招待、などを実施しました。

親子との対話を重視して継続

2015年度も、お子さんたちへの遊びと学習の支援、親御さんたちとの対話などを通して、相互交流を継続していく予定です。



福島県等からの 避難者と地域の交流支援活動

在住支援交流サロン さんさん広場

日の差し込むような
温かな場所をめざして



地域コミュニティの活性化 学生による地域福祉活動

居心地の良い地域をめざして



子どもたちの遊び支援…集会室内ではトランプなど、晴れた日は公園でサッカーなどをして、みんなで一緒に楽しく遊んでいます。遊びを通して子ども同士の輪を広げます。

子どもたちへの学習支援…子どもたちに学校の勉強でわからないところを広場にある教材を使うなどして手伝っています。乳幼児に言葉を教えることもあります。

多世代交流の場…子どもから大人までおしゃべりできる憩いの場も行っています。子どもの両親や高齢の方まで幅広い年齢層の方々と、おしゃべりをしながら交流します。

夏祭り・冬祭りの開催…だれもが楽しく、交流することができるお祭りを学生と地元自治会が協働して開催しています。失われつつある地域の行事を、学生の力で再生し、地域に還元しています。

地元自治会と協働しての地域防災…東日本大震災の教訓を活かし、大規模災害を想定した地域防災を地元自治会と協働して行っています。支援を受け入れる地域の「受援力」を高める取り組みです。

NPO中間支援組織のサポート…NPO活動の推進と地域の課題解決、活性化を目的とした新宿NPO協働推進センターの運営や活動をサポートしています。NPOに関心がある方におすすめです。

TS Three

学生支援局 Three-S（スリーエス：Support Station by Students）は、コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクトと連携し、被災地への“想いを形に”して発信・継承などの復興支援活動に取り組む学生団体です。

学内活動

- 写真展の開催
- 学園祭での石巻焼きそばの販売
- 広報誌の発行

震災の風化が進む中で、活動を通して現在の東北の状況を伝えている

学外活動

関東

- Joy Study プロジェクト
他大学と協同でのサロン活動

- 地域イベントへの参加
夏、冬祭りなどに参加
地域住民の方との交流防災ワークショップに参加

東北

- 石巻・女川ツアーの開催
参加者を今後の活動につなげるバスツアー。何かしたいと思う学生が対象



復興支援活動 参加の流れ

まずは
メールニュース
登録

登録先●東日本大震災復興支援推進室

以下の項目をメールしてください。

①氏名（ふりがな）②学部・学科・学年 ③学籍番号

④携帯電話番号 ⑤rikkyo メールアドレス

fukkoushien@rikkyo.ac.jp



1 参加申し込み

最新の募集情報をメールニュースや復興支援室（新座6号館3F）でチェックして、参加を希望する活動プログラムに申し込む。応募要項をメールで送信するか、復興支援室に直接来室して申し込んでも OK。支援室まで気軽にお問い合わせください。

2 ガイダンス

応募した活動プログラムのガイダンスに出席する。参加メンバーの顔合わせ、活動内容の確認、旅費の説明、事前準備についてなど。学生の自主性を尊重します。

3 現地活動

現地拠点で復興支援活動に参加する。
「陸前高田市」「気仙沼市大島」「南三陸町」「石巻市」「いわき市」「新宿区」「東久留米市」の主要七拠点ほか。

4 振り返り

活動後の振り返りミーティングに参加する。参加者同士で、活動の成果と改善点、思いの共有。次回参加者への継承。フィードバックシートの提出。活動費の精算など。

5 活動の継続

前回の経験を活かした支援活動の継続と深化。他のプログラムへ参加し幅広い視野の確保と経験の共有。復興支援活動を通じて培った経験・ノウハウを学内、社会へ還元する。

※活動費の補助

参加者には、復興支援室から旅費の補助があります。初参加者は交通費の半額と宿泊費の75%を補助。リピーターは、交通費・宿泊費ともに75%を補助します。



東日本大震災復興支援推進室とは

2011年4月13日、コミュニティ福祉学部は、東日本大震災復興支援プロジェクトを立ち上げました。学生と教員が一体となって、被災された方々と被災地に、細く長く寄り添う伴走型の交流支援活動をめざしています。

本プロジェクトを支える事務局として、新座キャンパス内に設置されたのが、東日本大震災復興支援推進室（復興支援室）です。現地七拠点で展開している支援活動の企画運営のほか、参加学生の募集やガイダンス、現地引率、派遣先との連絡調整、助成金の申請、活動の成果の継承・発信、大学教育や社会への還元などを行っています。

復興支援室では毎日、多くの学生たちが集い、交流し、相談し合う姿が見受けられます。現在、参加者の約4割が、コミュニティ福祉学部以外の学生となっています。全学部生に門戸は開かれています。長期化する復興への歩みは道半ば。気さくなスタッフが、皆さんの参加をお待ちしています。



立教大学

コミュニティ福祉学部
東日本大震災復興支援推進室

新座キャンパス 6号館 3階 N631号室

〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL : 048-471-6967 / E-mail : fukkoushien@rikkyo.ac.jp

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/csc/>